

令和6年度第3回史跡めぐり

「川越城本丸御殿・喜多院・蔵の街」

令和7年3月6日（木）実施

1. 「川越城本丸御殿」



前々日の雪の影響もなく、総勢26名で埼玉県川越市を目指し、午前8時10分に出発。順調に進み川越市役所のバス乗降所に時間通りに到着、シルバー人材センターのガイドさんと合流し、最初の見学地川越城本丸御殿には9時30分に到着。川越城は、長禄元年（1457年）に扇谷上杉持朝（もちとも）が家臣の太田道真（資清）・道灌（資長）父子に命じて築城したもので、当初の規模は、後の本丸・二の丸を合わせた程度と推定されています。その後、寛永16年（1639年）川越藩主松平信綱が、川越城の大規模な拡張・整備を行い、本丸、二の丸、三の丸等の各曲輪、四つの櫓、13の門よりなる城郭となり、総坪数は99,000坪余りの規模をもつ城郭となりました。そして本丸御殿は、嘉永元年（1848年）に時の藩主松平斉典が造営したもので、当初16棟、1,025坪の規模を誇っていました。現在は本丸御殿の一部として玄関・大広間・家老詰所を残すのみとなりましたが、日本国内でも本丸御殿が現存する例は極めてまれで、玄関に入ると廊下がぐるりと部屋を取り囲んでおり、いくつかある部屋の装飾は質素で装飾などは最低限にとどめられています。部屋を仕切る扉に描かれた杉戸絵や車寄せの構えは豪壮で、「御殿」と呼ぶにふさわしい造りとなっています。本丸御殿が現存するお城は二条城・高知城・掛川城があります。

2. 「三芳野神社」



三芳野神社は、平安時代初期の創建とされ、川越城築城後は城内の守護として、歴代城主をはじめ多くの人々の篤い崇敬を受けてきました。旧川越城内の天神曲輪にあり、四方を土塁と堀に囲まれていました。この点から「お城の天神さま」ともいわれています。素盞烏尊（すさのおのみこと）と奇稲田姫命（くしいなだひめのみこと）を祀っており、のちに北野天満宮の菅原道真公の神霊を配祀しました。

現存する社殿は、寛永元年（1624年）川越城主酒井忠勝が三代将軍家光の命を受けて造営したもので、幕府の棟梁鈴木江守長次によって再興されました。明暦2年（1656年）には、四代将軍家綱の命を受けた川越城主松平信綱により大改造が行われ、江戸城二の丸の東照宮本殿を移築し当本殿とし、寛永に建てられた拝殿との間に幣殿を新しく設け、権現造りの形態としました。その格調の高さは桃山時代の気風が反映されているといわれています。

また、この天神様は、童謡「とおoryんせ」発祥の地といわれています、川越城内にあったため、一般人が参拝するには長くて細い道を辿る必要がありました。また、参詣客に混じって不審者が侵入するのを防ぐために、外に出る際は厳しく取り調べを受けることもあり。そのことから、「行きはよいよい帰りは怖い〜」という、現在まで歌い継がれているその道を通って喜多院に向かいました。

3. 「喜多院」



喜多院は、慈覚大師が天長7年（830年）に創建した天台宗の名刹で、正式には星野山無量寿寺喜多院といいます。

江戸時代初期、名僧天海大僧正が住職をつとめた寺として、また江戸城から移築された三代将軍徳川家光・春日局ゆかりの建物をはじめとする、多くの文化財を所蔵している喜多院の名は、埼玉県を代表する寺院として全国的にも有名です。

徳川家康の信任を得ていた天海僧正が慶長4年（1599年）第27世住職となると、幕府からの厚い庇護を受け、江戸城から豪華な壁画や墨絵で装飾された「客殿」と呼ばれる「家光誕生の間」や、三代将軍家光の乳母として知られる春日局が使用していた「書院」と呼ばれる「春日局化粧の間」などが移築されました。

江戸城ゆかりの建造物に加え、山門・鐘楼門・慈眼堂などが重要文化財に指定されており、また隣接して、駿河で没した徳川家康公の遺骸を日光山へ運ぶ途中で法要が行われたことから建設された日本三大東照宮の一つである仙波東照宮もあり、江戸時代の香りを色濃く残す徳川家とゆかりの深い寺です。

また、日本三大羅漢の一つに数えられる五百羅漢は、人間の喜怒哀楽をよくとらえた様々な石仏で、およそ540体が境内に並び、中には干支が彫られている羅漢さんもいます。

4. 「昼食」



市役所から本丸御殿、三芳野神社、喜多院と徒歩移動、そして冷たい北風で疲れましたが、喜多院のそばにある寿庵にて、うな重を頂きました。

5. 「蔵の街」



江戸時代、川越藩主松平信綱の町割りによって、通りに店が向かい合う形の家並みができあがったが、度重なる大火のため幕府がかわらぶきを奨励し、火事に強い建物として江戸の町でも土蔵造りが流行しました。これによって商業で江戸との結び付きが強かった川越でも、蔵造りの商家が建つようになりました。現在の蔵造りの多くは、川越大火後（明治26年）に建てられたもので、今も30数棟が残っています。

大きな鬼瓦の屋根に黒しっくいの壁と分厚い観音開きの扉…。まるでタイムスリップしてしまったかのような感覚になる蔵造りの趣豊かな建物が立ち並ぶ町並み「一番街」。同じように見えて一軒一軒違う造りをしており、それぞれに個性を出しながら、堂々とした風格さえ漂わせています。その中で最も古く、1792年（寛政4）に建てられた大沢家住宅は国の重要文化財に指定されています。

・時の鐘



寛永4年(1627)から同11年(1634)の間に川越城主酒井忠勝が、多賀町(いまの幸町)の現在の場所に建てたものが最初といわれています。

創建された江戸時代の初期から、暮らしに欠かせない「時」を告げてきた小江戸川越のシンボルです。現在の鐘楼は、明治26年(1893)に起きた川越大火の翌年に再建されたもので4代目に当たり、3層構造で、高さ約16メートルです。町の3分の1が焼失した中で、暮らしに欠かせない「時」を告げるため、自らの店も再建していない川越の商人達によって、いち早く建て直されました。

・菓子屋横丁



明治の初めから菓子を製造していました。それが、関東大震災で被害を受けた東京に代わって駄菓子を製造供給するようになり、昭和初期には70軒ほどの業者が軒を連ねていたといわれています。「菓子屋横丁」に漂う素朴で懐かしい香りは、平成13年環境省の“かおり風景100選”に選定されました。

2015(平成27)年6月の火災により5棟全焼しました。

現在は20数軒の店舗が連なる川越の有名なスポットです。素朴で昔懐かしい味を今に伝える菓子作りの店が立ち並び、一歩足を踏み入れると、誰もが子供に返ったような気分になります。